

結核を患っていた父を見て、「人の病気を治したい」と医療の道へ進んだ。浜松医科大学(浜松市東区)を卒業後、恩師と同じ産婦人科医として、聖隷三方原病院(同市北区)を皮切りに県内外の病院を回り、2013年から現職。旧浜名郡(現浜松市西区舞阪町舞阪)出身。58歳。

—10年を振り返って。
「あつという間だった。1998年ごろから10年以上にわたり、分娩(ぶんべん)数が増え続け、人員的に余裕のない時期もあったが、地域の周産期を支えるという思いでやってきた」

10周年を迎えた磐田市立総合病院
周産期母子医療センターのセンター長

とくなが なおき
徳永 直樹 さん (中区新津町)

この人



—センターの存在意義は。
「リスクの高い妊産婦や新生児に、より安全な医療を提供できるようになった。外来、産科、新生児特定集中治療室(NICU)の看護師を一括で管理することで、妊産婦の情報も共有できるようになり、安心

感にも結びつくと思う」
—産婦人科医の醍醐味(だいごみ)は。
「新しい命の誕生に立ち会えること。『おめでとうございます』を多く言うことができ、喜びを味わえるのは産婦人科医ならではの」
—今後の抱負は。
「有事に滞りなく対応できるよう訓練を重ね、余裕のある組織を作り上げていく。生命の誕生は素晴らしいこと。幸せなお産の手助けをしていきたい」

◇ 愛読書は村上春樹の「風の歌を聴け」。
(磐田支局・駒木千尋)